

## 東彼杵町木場地区

13

# 一般社団法人 東そのぎ 木場みのりの会

人口 232人

世帯数 87世帯

設立 平成28年7月

(令和3年9月末現在)

### 地域の現状と課題

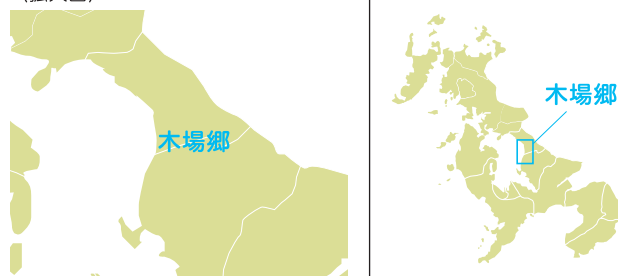
東彼杵町木場地区は大村湾を望む山あいの景勝地です。出口山の豊富な湧き水を生かした棚田米の産地で、美しい水田が広がっています。集落の人たちは毎年、湧き水の水源地にしめ縄を張るなどの伝統行事を400年弱にわたって続け、恵まれた土地への感謝を表しています。

時代の変遷とともに農業が衰退して米価も下がると、田畑を手放して地域を離れたり、後継者不足で廃業したりする人が増え、荒廃地や遊休地が出てきました。人口も徐々に減り、令和3年9月末時点で232人。人口全体に占める65歳以上の高齢者の割合(高齢化率)は、ここ10年間で16.7%上がって42.2%になっています。

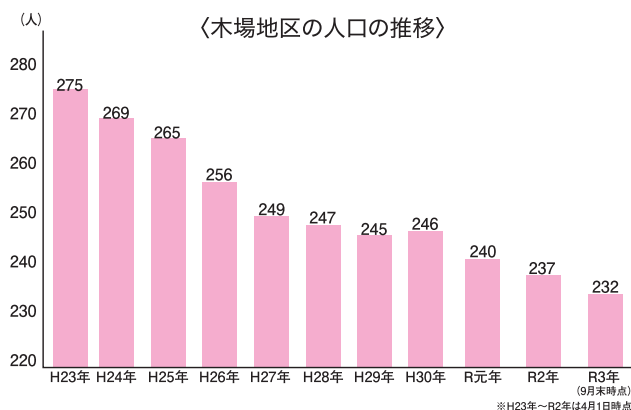
農業が盛んだった時代は、地域の人たちが日常的に顔を合わせていましたが、多くの世帯が兼業農家となり、交流がなくなっていました。地域に「何かせんば」という思いがあった中、平成25年に長崎県の農山村活性化事業の支援を受けて「木場地区活性化協議会」が発足。進行する少子高齢化などの地域課題改善に向けて住民同士でアイデアを出し合い、地元の米をはじめとした農産物を軽トラックに積んで販売する「軽トラ市」などを実施してきました。

3年計画の取組を終えた後「ここで終わるのはもったいない」と、平成28年7月、同協議会のメンバーから有志を中心に、新たな地域おこしグループとして「東そのぎ木場みのりの会」を設立しました。

〈拡大図〉



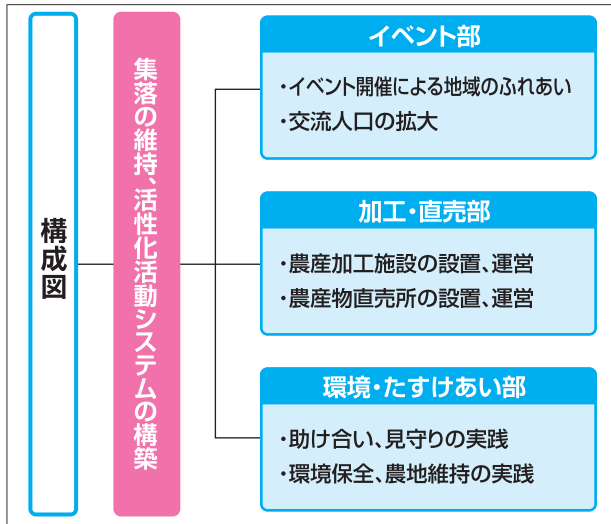
〈木場地区の人口の推移〉



木場地区を示すモニュメント=令和元年10月、東彼杵町木場郷



大村湾を望む棚田=令和元年10月、東彼杵町木場郷



東そのぎ木場みりの会の構成図



直売所のコンセプト図

## 現在の主な活動内容

東そのぎ木場みりの会の会員数は42人です。会の発足時、メンバーは日々話し合いを重ねました。意見がぶつかる時もありましたが、それぞれに地域の未来を思う気持ちがあつてのことでした。結果、地区の美しい景観や豊かな資源を活かし切れていないという課題に気づき、その活用を各種事業の柱としました。スローガンに「ふれあい いきがい たすけあい」を掲げ、イベント、加工・直売、環境・たすけあいの3部門を中心に活動を組み立てています。

### 〈米どころ 木場のむすびの取組〉

現在、会の事業の拠点となっているのが、農産物加工直売所「米どころ 木場のむすび」です。平成30年7月、大村市を起点とした広域農道「大村湾グリーンロード」沿いにオープンしました。営業は毎週金曜～日曜の午前10時～午後4時で、「木場湧水米」や新鮮な野菜を使って農家のお母さんたちが作ったおにぎりや総菜が購入できます。デザイナーに発注して、ロゴやパッケージなどのデザインもこだわりました。店名の「木場のむすび」には、看板商品のおにぎり（おむすび）と、ここが「寄合所」となって人や地域を結ぶという意味が掛けられています。

直売所ができたことで、その名の通りに地区内はもちろん、県内各地や佐賀などの県外から

「イベント部」は、木場地区を示すモニュメントのクリスマスイルミネーション点灯式や、子どもたちのそば打ち、餅つき体験など、地域の自然と伝統を大切にイベントを企画。交流を促進する機会をつくっています。「加工・直売部」は、活性化協議会時代も実施していた「軽トラ市」を継続したり、県内の食のイベントに出店したりと、住民が生きがいを持って農業に取り組むための販売先を増やしました。「環境・たすけあい部」は、地区の環境保全や高齢者を見守るための巡回訪問などを実施。住民からじかに要望や意見を聞き取りながら活動に反映させ、地域の維持に努めています。



「米どころ 木場のむすび」の外観=令和3年11月、東彼杵町木場郷



農家のお母さんたちが握ったおにぎり

も買い物客が訪れるようになり、店舗内で交流が広がっています。ここで多くの人に「木場湧水米」のおいしさを知ってもらえば「外貨獲得」につながり、地区の農家の売り上げと生産意欲の向上も期待されます。

残念だったのは、オープンから約1年半後に始まった新型コロナウイルスの流行です。来客は落ち込み、大口の弁当注文もなくなった上に集客イベントもできず、売り上げは下降気味です。最終的には地域でお金を循環させることはまだ難しいのが現状ですが、運営メンバーは「何もしなければ、過疎化が進むだけ。5年、10年続けることで経営を軌道に乗せれば、何か変わるはず」と意気込んでいます。



直売所では「木場湧水米」も購入できる

## POINT

- ・強みを活かして発信する拠点を創設
- ・地区内外の交流が拡大
- ・地域でお金の循環を目指す

## INTERVIEW

「物事は楽しくないと続かない」という持論があります。なので、無理はせず、できることを積み重ねていくという方針で活動しています。直売所を開けるのも週末の1日約6時間にして、働くお母さんたちにできるだけ負担が少ないような営業を心掛けています。

直売所の経営がもう少し軌道に乗ってくれば…という気持ちもありますが、私たちの活動目的は、その経営だけではありません。目標はあく



東そぎ木場みのりの会  
副代表  
松尾 幸彦さん

## 地域を思う仲間とともに

までも「ふれあい いきがい たすけあい」。直売所は、そのための一部と捉えています。

課題はいろいろとありますが、幼なじみの末岡幸人代表ら、地域を思う仲間がいたから、助け合ってここまで来られました。活動を始めて良かったです。さらなる会の発展のためには、外からの支援もありがたいですが、やる側の自分たちがその気になり、努力していかないといけないと思っています。

## 行政からの支援

木場のむすびは、集落維持や活性化に向けた住民主体の取組を支援する長崎県の「小さな楽園づくり交付金」を活用して創設しました。各種交付金、補助金に加え、東彼杵町役場を通じて、町内でまちづくりに取り組む「東彼杵ひとこともの公社」や、ゲストハウスの「さいとう宿場」、家庭料理店の「ちゃぶ台三葉」などとのつながりができ、連携して地域を盛り上げています。



近隣のまちづくりグループとの交流＝平成30年12月、木場のむすび前

## 今後の課題・展望

会を引っ張る代表、副代表ともに60代半ばを迎え、今後の中心となれる後継者がいないわけではないものの、将来的に活動をどう続けていけるかは課題の一つです。

令和2年以降、コロナ禍でしばらくイベントができていませんでしたが、今後は状況を見ながら、地域で楽しめる企画を再開していく方針です。人が呼べれば、木場のむすびの売り上げアップにつながります。携わる生産者たちが食べていけるような仕組みづくりをして、地域でお金が回るようになれば、意欲的に参加する人

も出てきやすくなると期待されます。

広報も課題の一つで、活動について広く発信する手法が十分ではないのが現状です。SNSを効果的に活用するなど、広く宣伝するための戦略を練っていく必要があります。



餅つきを楽しむ親子＝平成30年11月、木場のむすび前

## INTERVIEW

木場地区で代々続く農家を継ぎました。豊かな恵みを残してくれた祖先に感謝しています。生まれ育ったこの地区が、いつまでも存続してほしいという思いが一番です。あと5年、10年すれば、人口はさらに減ると予想され、地区の衰退を心配しています。

地区の将来を担う若者たちに、希望となる何かを残したくて、この活動を始めました。本来は地区の全員参加が望ましいのですが、



東そのぎ木場みのりの会  
代表  
末岡 幸人さん

## 地区の若者に希望を残す

限られた人になっています。今後、若者たちに取り組を引き継いでもらうためにも、地域内でつながりを強め、地域に根付くような活動にしていきたいです。

私は木場のむすびでたくさんの交流が生まれて人の輪が広がり、地元の米を食べて「おいしい」と喜んでもらうことがうれしいです。そんなふうには、若者たちにも自分が生まれ育った土地を好きになってほしいと願っています。

### まとめ

- ① 強みを活かして発信する拠点を創設
- ② 地区内外の交流が拡大
- ③ 地域でお金の循環を目指す
- ④ 「やる側」がその気になり、努力することが必要
- ⑤ 生産者が食べていける仕組みづくり
- ⑥ 地域内でつながりを強め、地域に根付く活動を目指す

## 取材を経て

木場地区の大村湾を望む棚田が広がる景観は非常に美しく、夕方は大村湾に沈む夕日、秋には黄金色の稲穂と真っ赤なヒガンバナの共演など、時間帯や季節によっても多彩な表情が見られるそうです。「木場湧水米」もみずみずしい味わいが格別で、この地区が持つポテンシャルの高さを感じました。

スローライフへの関心が高まり、都会から地方の農村へ移住するケースも増えている一方で、この地区はまだ移住者がいません。木場のむすびを通じて、地区外の人と交流する文化や、受け入れる人の温かさが生まれています。このことから、活動の発信と併せて、農業の担い手不足がさらに深刻化する前にUターン、Iターン希望者の移住先としてのPRも選択肢の一つです。